地域研究の展開

徳永光展

優れた行為を成し得るためにはその背後に確固たる意義の自覚を伴っている必要があるのは言うまでもない。研究が持続され、業績として結実するかどうかは研究者のモティベーションの強度に大きく依存されているものだが、その際には研究の意義を自らの主体の中で、或いは社会的にどう意義付けていくかが試されることにもなる。何のための学なのか、その成果はどのように生かされていくのか。研究者は誰しもこの問いにぶつかり、解答を探し求める。

概して自然科学者にとって、それはさほど頭を悩ます問いではないのかもしれない。自然界の真実を探り当て、新たな知を付け加えることに異議のあろうはずがなく、また自然科学の進歩が物質的な豊かさ追求に不可欠であることを考えれば、そこに研究の存在意義を見出すことも容易に可能であるからだ。

けれども人文の領域を志す者にとって、自らの行為の意義を第三者に等しく理解してもらうことは容易でなく、その事実がひいては自身のアイデンティティの根幹に関わって深い疑念となって立ち現れる結果ともなる。人文科学に如何なる意義を見出すべきか、客観的な解が存在しにくいこの領域が学としての存在を果たして許され得るのか、その将来像をどのようにイメージし、構築すべく努めるべきなのか。今一度原点に立ち返る必要を感じるのである。

人文は平たく言ってしまえば、生き方追求に資する学である。その源は古く中世ヨーロッパの神学や教養諸学に遡ることができる点からも分かるように、一貫して人生観・世界観・人間観を扱う領域であった。何を信じるかが神学（宗教）から哲学・思想へと追求され、過去の時代・人物に現代を生きる知恵を求むべくして歴史学が、矛盾を昇華させた虚構の作品から生き方を学ぶべくして文学が、そしてそれらの土台に文献解読手段としての言語学や表現方法を追求する修辞学がそれぞれ発展していった。日本における人文科学も帝国大学を中心に概ね同様な展開を遂げ[1]現在に至っている。学問の成熟は専門分化を進行させる宿命を持っているが、その流れはともすれば根本の目的を見失わせる危険性をも内包せざるを得ない。が、その矛盾は「学問のための学問」（reine Wissenschaft）を正当化する事で解決されようとしてきたかに見える。

しかしながら、そのような考え方がエリート主義的なものであることは言うまでもなかった。学問が余裕ある特権層のみに独占されていた時代・社会には通用したその理論も現代の大衆社会に

あっては説得力を失っていかざるを得ない。学問と言い、研究と言い、それらはほぼ大学に狙われているが、経済基盤を必要とする大学が社会から孤立し、象牙の塔的に存在し得ないのは自明である。とすれば、社会が大学に関心を持ち、研究業績の評価が試みられるのも自然の成り行きと見るべきかもしれない。それは何のための研究かが社会的に厳しく問われているということでもある。その過程にあって、既存のパラダイムのみでは現在の複雑化した時代・社会を読み解き、自己を確立するのに限界があることもはっきりしてきた。それは従来文学部で行われてきた学問領域、西洋や中国・日本の哲学・歴史・文学のみではもはや全体が把握し切れないことを意味し、新たな知の枠組みが求められている現状をも示唆するのである。[2]

比較という方法論は洞察を深化させるに当たって有効な場合が少なくないが、現在人文の領域ではこの手法による抜本的な知の組替えが急速に進行しているとの印象を禁じ得ない。自己を知るには他者との比較考察が不可欠であるが、国際化・情報化[3]が進展し、世界の諸地域・諸民族との折衝が欠かせなくなった今、地域についての情報及び自国との比較検討の必要性が自覚されてきている。地域研究はもともと異国趣味的或いは政策的関心から出発したが、人類の平和共存のためには異文化の理解・受容並びに自国文化の紹介・伝播が必要との共通理解が拡がった結果、人文科学の新たな領域として認知されつつあるのである。[4] 地域についての情報は公的には政治・外交・ビジネスの諸場面で、私的にも外国人との付き合い、海外旅行などの場で強い需要を持っている。海外旅行ブームは見たい、知りたいという素朴な願望が人々を突き動かした結果生じたものだが、その根底には異質なものと出会い、視野を拡げることによって、自らを精神的に豊かにしたいというまさに人文の根本とも言うべきフィロソフィーがしっかりと根を張っているに違いないのである。

日本では地域研究の成立と大学の大衆化はパラレルに進行した。[5] 大規模化に伴い大学の研究機能が相対的に低下する中で、情報の集中的な収集・管理及び発信基地としての役割を果たすシンク・タンクの必要性も自覚されてきた。また、国際社会における日本の地位を不動のものとするためには海外における日本研究（Japanese Studies）の育成・強化が不可欠との認識に達し、日本に情報発信基地の設立が求められたのである。

その結果、文部省・大学共同利用機関の人文系研究所はいずれも〈地域〉を軸に編成され、今日に至っている。日本研究の到達点として、国文学研究資料館（東京　一九七二）、国立歴史民俗博物館（千葉　一九八一）、海外への発信基地として国際日本文化研究センター（京都　一九八七）が整備され、日本も含めた世界の諸地域の生活文化に関する情報は国立民族学博物館（大阪　一九七四）に結集して保存されることとなった。加えて、それに準じる地位を与えられた大学附置の共同利用研究所として、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（一九六四）がある。[6]

また、研究者養成の場は現状では大学院に独占されているが、臨時教育審議会の最終答申発表（一九八七）以後に設立された人文系の国立大学博士課程研究科はいずれも地域研究への指向を明確にしている。総合研究大学院大学文化科学研究科、大阪大学言語文化研究科（一九八九）、京都大学人間・環境学研究科（一九九一）、東京外国語大学地域文化研究科（一九九二）、東北大学国際文化研究科、新潟大学現代社会文化研究科、岡山大学文化科学

研究科（一九九三）、九州大学比較社会文化研究科（一九九四）などが発足し、人文における新たな知は地域研究の中で構築される様相を呈しだした。社会科学系についても、名古屋大学国際開発研究科（一九九一）、筑波大学国際政治経済学研究科、神戸大学国際協力研究科（一九九二）、金沢大学社会環境科学研究科（一九九三）、横浜国立大学国際開発研究科、大阪大学国際公共政策研究科、広島大学国際協力研究科（一九九四）など、日本が如何に発展するかという発想をもはや過去のものとし、アジアの中に日本を位置付け、日本が如何に国際社会のリーダーとして他国に貢献するかを模索する試みが始まっているのである。

国語・国文学の世界を取ってみても、新たな研究スタイルの胎動を読み取ることができる。入り口は作家・作品研究であっても、中身は総合的な人文そのものであって、あらゆる方法論・知のパラダイムが駆使されている。[7] この背景には研究の国際化も密接に関与している。[8] 世界各国の大学で日本研究が市民権を得、日本文学の翻訳と受容が進みつつある現在、[9] 余計な先入観のない外国人研究者や留学生の業績から新たな読みを教えられることも少なくない。また、日本語学習者の増大に伴い、[10] 彼らが犯す誤りを検討する機会も増え、日本語の隠された秘密が次々と明らかになっていった。それは、間違いなく日本語学の発展を保障するものである。[11]

このように、研究・教育、どちらの場面を取っても学際的な日本研究を目指す分野が確立する素地が整いつつあるわけである。[12] 日本語・日本文化を体得した自己を世界の中に位置付ける試みはようやく端緒がついたばかりだが、比較日本文化論とでも呼び得るその領域には主として米・英・独・仏で生まれた理論の輸入学・翻訳学に終始し、ともすれば独創性に疑問が持たれがちだった日本の人文科学が飛躍する萌芽が秘められているかもしれない。研究の最前線が文化学と呼ぶべき錯綜した荒野であるならば、狭い専門に囚われることなく、持てる知識を総動員する積極的な姿勢を必要とする。同時にそのような態度こそがあるべき人文学徒の姿と断言し得ることも可能なのである。

［註］

① 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史　通史二』（東京大学　一九八五）六十三～七十頁

② この事情が人文系学部の大講座制への移行を促す一因となった。

③ 教育政策研究会編著『臨教審総覧　上・下』（第一法規　一九八七・十一）国際化・情報化は、臨時教育審議会では二次、三次及び最終答申で一貫して重点項目として取り上げられ、国立大学学部レベルでの成果として、国際系では神戸大学国際文化学部（一九九三）、宇都宮大学国際学部（一九九五）、情報系では九州工業大学情報工学部（一九八七）、群馬大学社会情報学部、名古屋大学情報文化学部（一九九四）の発足をみた。

④ 井門富二夫「地域研究の過去と現在――学際課程の展開を追って――」（「筑波大学地域研究」6　筑波大学大学院地域研究研究科　一九八八・三）

⑤ 大学の大衆化はトロウによって該当年齢人口に占める在学率が十五パーセントを越えた状態と定義されているが、それは日本では一九六六年のことであった。一方、国立大学で地域

研究が明確に位置付いたのは、少し遅れて地域研究研究科修士課程が筑波大学（一九七五）、東京外国語大学（一九七七）及び広島大学（一九七八）に開設された頃と理解すべきであろう。

マーチン・トロウ／天野郁夫・喜多村和之訳
『高学歴社会の大学』（東京大学出版会　一九七六・十）
江原武一『現代高等教育の構造』
（東京大学出版会　一九八四・二）二十二頁
⑥ 文部省編『我が国の文教施策』（一九九一・十一）
三十六頁～四十頁
⑦ 石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織
『読むための理論――文学・思想・批評』
（世織書房　一九九一・六）
⑧ 新堀通也編「外国大学における日本研究」
（「大学研究ノート　第六十号」
広島大学大学教育研究センター　一九八五・一）
園田英弘編「世界の日本研究」第一～六号
（国際日本文化研究センター一九九〇・十二～一九九四・三）
「世界の日本研究――歴史と現状」
（「日本研究　第十集――国際日本文化研究センター紀要」
角川書店　一九九四・八）
Overseas Japanese Studies Institutions;
The Fukuoka Unesco Association,1994
⑨ Modern Japanese Literature in Translation,
A Bibliography Compiled by The International House of Japan Library;
Kodansha International LTD,1979 Japanese Literature in Foreign Language 1945-1990 Compiled by the Japan P.E.N.Club;
Japan Book Publishers Association ,1990
福田秀一『海外の日本文学』（武蔵野書院　一九九四・四）
⑩ 「世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉」第一号
（国際交流基金日本語国際センター　一九九四・三）
⑪ 日本語教育学会編『日本語教育ハンドブック』
（大修館書店　一九九〇・三）
⑫ 梅原猛『日本とは何なのか　国際化のただなかで』
（ＮＨＫブックス　一九九〇・九）

［付記］
大学共同利用機関名の後には設置年を、大学・大学院名の後に記した数字は学生受け入れ開始年を示した。

（とくなが・みつひろ）